

# 誰かに教えたくなる 科学技術の話 68

## 人間が絶滅させた 「日本の動物」



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

日本の国土面積は世界の六十一番目であるが、棲息している哺乳動物は一八〇種、鳥類は七〇〇種で、同様の島国のイギリスの九六種、二四七種と比較すると多様である。主要な要因は国土が南北に三〇〇キロメートルも展開しており自然環境が多様ということにある。しかし、その日本でも近代以後、数多くの生物が絶滅してきた。前回の世界の絶滅動物の続編として日本の実態を紹介する。

### エゾオオカミ（一八九六年絶滅） ニホンオオカミ（一九〇五年絶滅）

アイヌ民族はエゾオオカミをホロケウカムイやユクコイカムイなどの名称で神聖な動物として共存していたが、明治時代になって、北海道の開拓とともに飼育されるようになったウマを襲撃する事態が頻発しはじめた。そこで一八七七年から毒餌によって次々と駆除されるようになり、八八年までに約三〇〇頭が死亡した。そして九六年の毛皮の売買の記録を最後にエゾオオカミは絶滅した。

それ以後も千島列島には棲息していたようであるが、最近の報告では、そこでも絶滅したとされ、完全に地上から消滅した。ところがエゾオオカミの絶滅によ

って天敵が不在になったエゾシカが道内では急速に増加して作物の被害が顕著になり、しばらく以前から外国の小型のハイイロオオカミを導入しようという意見も登場している。生物の世界からすれば人間は勝手な存在である。

本州以南には別種のニホンオオカミ（図1）が棲息していた。秩父の山奥の三峯神社や両神社の山門の両側の狛犬はオオカミであるように、古来、神聖な動物とされ、農村ではイノシシなど害獣を駆除する益獣ともされていた。しかし明治以後の人口増加と農地拡大により害



図1 ニホンオオカミ

獣とされ、鉄砲の普及とともに減少、一九〇五年に奈良県鷺家口で捕獲されたニホンオオカミが最後の一頭となった。

### ニホンカワウソ (二〇一二年絶滅)

山口県岩国市で生産されている日本酒「獺祭」は最高級品が海外では一本一〇万円近くで購入されるほどの人気であるが、「獺」はカワウソで、捕獲した魚を祭壇に供えるように岸边に並べることから「獺祭」という言葉が誕生したとされる。その一種のニホンカワウソ(図2)は日本列島の海岸や河川や島々に広範に



図2 ニホンカワウソ

棲息し、一八八〇年代には東京にさえ棲息していた哺乳動物であった。

毛皮が二層になっていてそのため防水効果や保温効果が良好なことから、大正時代には年間一〇〇匹以上が捕獲されたというほど乱獲されて激減した。一九二八年に捕獲禁止となったが、戦後の河川改修の進展の影響もあり棲息区域が急速に減少した。一九五〇年代には北海道から九州までの一部で棲息が確認される程度になり、本州と九州では一九五四年、北海道では翌年に絶滅したとされる。

一九六四年に天然記念物、翌年には特別天然記念物に指定されたが手遅れであり、その時期に棲息していたのは四国の愛媛県と高知県のみであった。以後、七三年には愛媛県で幼獣を捕獲、七五年には高知県で成体を捕獲、七七年には高知県で撮影された。しかし七九年に高知県で生存が確認されたのが最後で、九二年には目撃情報もあったが、二〇一二年に絶滅とされた。

### トキ (二〇〇三年絶滅)

日本の国鳥はキジであるが、全身が白色で頭部と脚部のみが赤色のトキは『日本書紀』にも記載され、江戸時代中期に



図3 トキ

編纂された『諸国産物帳』にも広範に分布していると記録されているように、日本を象徴する鳥類である(図3)。十九世紀に来日していたドイツの医師F・F・フォン・シーボルトが剥製をオランダに送付し、一八七一年に学名が「ニッポニア・ニッポン」と命名された。

日本では広範に棲息していたが、明治時代以後に乱獲され、一九二〇年代には絶滅したと推定されていた。ところが三〇年代になって能登半島と佐渡に約一〇〇羽の棲息が確認されたが、棲息環境の悪化により急速に減少した。五二年には

特別天然記念物に指定されたが効果はなく、八一年に生存していた六羽が捕獲されて佐渡で飼育されることになり、野性のトキは消滅した。

残念ながら、それらは繁殖することなく次々と死亡し、二〇〇三年に最後の一羽のキングが死亡して日本のトキは絶滅した。しかし絶滅以前の一九九八年に中国から寄贈された雌雄一対のトキ「友友」〔ようよう〕を飼育して翌年には繁殖に成功し、二〇〇八年から放鳥を開始したところ、二〇一二年には野生で繁殖するようになり、現在では日本に六〇〇羽程度が棲息すると推定されている。

### ニホンアシカ（一九九一年絶滅）

鼻先でボールを見事に操作するサーカスの花形動物ニホンアシカは、かつてはカムチャツカ半島南部や千島列島から日本全域に棲息していた（図4）。国内の縄文時代の遺跡からも頭骨などが発掘されているように古代から狩猟の対象であったが、江戸時代には各藩で禁猟対象として保護されるようになり、一七一二年発行の百科事典『和漢三才図会』には図入りで紹介されている。

しかし明治時代になると社会の混乱か



図4 ニホンアシカ

ら保護されなくなり、毛皮と獣脂を目的に乱獲されるようになった。それでも二十世紀初期には日本各地で生存が記録されており、三万頭から五万頭が日本周辺に棲息していたと推定されていた。とりわけ日本海沖の竹島には多数が棲息していたが、毛皮や獣脂だけではなくサーカスなどからの需要もあり、一九〇四年から八年で一万四〇〇〇頭が捕獲された。戦後になって竹島で約六〇頭の生存が確認されていたが、在日米軍が竹島を射撃演習の場所としたことも影響して減少し、絶滅したと推定されている。それ

後も一九六二年に千島列島で目撃、七七年にカムチャツカ半島で死骸の発見、七四年に礼文島沖で幼獣の捕獲、七五年に竹島で二頭目の目撃情報などがあり、現在は絶滅危惧に分類されているが、復活することは困難である。

### 多数の生物が絶滅した小笠原諸島

先月に紹介したモーリシヤス島のドードー、ニュージーランド島のジャイアントモアのように、天敵の存在しない絶海の孤島に悠然と生活していた動物は人間という地上最強の天敵の到来とともに短期で絶滅してきた。日本にも同様の絶滅が発生した群島が存在する。東京から南側に一〇〇〇キロメートルの彼方に存在し、約三〇の小島により構成される小笠原諸島である。

十五世紀以後に世界に進出しはじめた西洋の船乗りが小笠原諸島を発見して定住する人間も登場するが、一八七六（明治九）年に明治政府が日本の統治を宣言して日本人が定住するようになり、現在では約二六〇〇人が生活している。その結果、温暖な気候を利用して野菜や果物を商品作物として栽培するために森林が伐採され、その影響によって固有の動物

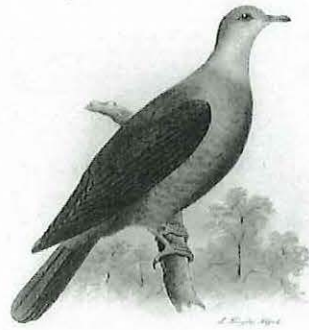


図5 オガサワラカラスバト

や植物が急速に絶滅することになった。

小笠原諸島は一度も大陸と地続きになつたことがないため、多数の固有の生物が生存してきた。しかし人間が定住するようになって以後、二十世紀前半までに絶滅した鳥類は「オガサワラガビチョウ」「オガサワラカラスバト」(図5)「オガサワラマシコ」など六種でしかないものの、一〇〇種程度が生存していた小笠原固有種の陸産貝類のうち約二〇種は絶滅している。

### 絶滅から蘇生したクニマス

奥羽山脈の西側にある田沢湖は水深四

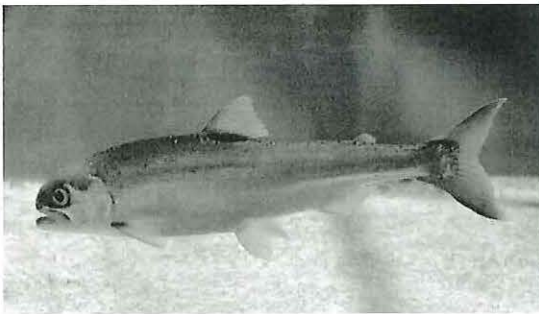


図6 クニマス

二メートルもある日本最大深度の湖沼で、ヒメマス、アメマス、イワナ、ウグイなど豊富な魚類とともに、世界でここにしか生存しないクニマスが棲息し、この地方の重要産品であった(図6)。しかし一九四〇年に発電施設を建設するため玉川から強酸性水を導水するようになった結果、湖水は酸性になり、多数の魚類とともにクニマスも絶滅した。

ところが二〇一〇年になって、京都大学の中坊徹次教授が学者でタレントの「さかなクン」にクニマスの素描を依頼するため、富士五湖の一湖である西湖で

外観がクニマスに類似しているヒメマスを四匹捕獲して「さかなクン」に送付したところ、二匹はクニマスではないかという連絡があった。そこで中坊教授が解剖や分析をしたところ、クニマスであることが判明した。

これは田沢湖から様々な河川を經由してクニマスが西湖まで到達したのではなく、田沢湖に強酸性水が導水される五年前の一九三五年に秋田から西湖にクニマスの受精卵一〇万個が送付され、孵化した稚魚が放流された結果で、地元ではクニマスと名付けられてクニマスと気付かれなかつたのである。その結果、二〇一三年にはクニマスは絶滅から野生絶滅に変更された。

孔子の編纂とされる『書経』には人間は「万物の霊長」と記載されている。世界の頂点に君臨するという意味であるが、実際に人間は生物世界を蹂躪し、鉱物世界の資源を枯渇させるほど君臨している。しかし二十世紀から開始された資源の大量消費グレート・アクセルレーション(巨大加速)により、生物も鉱物も破綻に直面している。その危機を警告しているのが人類の消滅させてきた生物である。